

(論 文)

## よさこい系およびYOSAKOIソーラン系踊りの 身体技能的特徴の一考察

岩 村 沢 也

---

### キーワード

よさこい YOSAKOIソーラン 踊り 体幹 ストリートパフォーマンス

---

### はじめに

戦後1954年(昭和29年)高知県高知市で戦後復興と1946年の南海大地震からの復興を願って生まれ、現在では路上での創作群舞が特徴のよさこい踊り系のダンスイベントと、1992年母の入院見舞いで高知を訪れていた北海道大学学生長谷川岳が、よさこい祭りに感銘して北大の学生仲間と共に札幌市の公道で始めたYOSAKOIソーラン系のダンスイベントの数は、双方合わせて、2014年11月現在、全国で200を超え、現代日本の一大ポピュラー文化現象として、日本各地に定着している。

この系統の踊りは、沢山の団体の創作パフォーマンスゆえに、様々なダンス・スタイルが内包されているが、世界に存在するダンスの身体技法上の特徴を俯瞰し、比較してみると、極めてユニークな点がいくつか挙げられる。まず、よさこい系・YOSAKOIソーラン系のダンスの多くは、基本の構え・あるいは踊りの途中で、両足を大きく横に開き、音楽に合わせて体幹を大きく左右に振る動きがあることである。また、この動きを基本に、180度、90度あるいは360度身体を一気に回転させる動きが、4分30秒のパフォーマンスの中で何度も取り入れられている。

20世紀に西洋社会で生まれたいわゆる『コンテンポラリーダンス』、現代の若者の『ストリート系ダンス』、そしてウクライナやロシアの『コサックダンス』を除くと、腰の上でこれほど体幹を大きく横に振り、そのグルーブ感(ノリ)を楽しむ踊りの系統は世界でないのではないか。世界の多くの伝統的踊りの基本は、上半身は腰の上をしっかり乗せ、重心を左右にぶれさせない(振らない)。しかし、現在の多くのよさこい系・YOSAKOIソーラン系の踊りは、この上半身の横方向の重心移動を「ノリ」として楽しむのである。

また、もう一つのよさこい系、YOSAKOIソーラン系の踊りの特徴は、腕を大きく伸ばし、様々な形でよく振ることである。これは、振り袖の衣装の色彩的効果を最大限に上げ、踊りの動作を大きく見せ観客にアピールすると共に、鳴子を持って最大限腕を伸ばして鳴らすことへの快感から導かれたように思われる。

本論文では、よさこいの歴史を文献・視聴覚資料を参考に振り返り、いつ頃からこの上半身(体幹)の横の振りが顕著になったのか、また腕を伸ばして鳴子を鳴らすようになったのはいつ頃で、

何がそうさせたのかを、高知のよさこい祭りと札幌のYOSAKOIソーランのビデオテープ、DVD、YouTubeの映像を資料として、その特徴ある振りの代表的な動きを抽出するものである。

### ユーラシアの民族舞踊と黒人の米国大陸のヒップホップ系ダンスとの比較

ここでは、よさこい系、YOSAKOIソーラン系の踊りの特徴を引き出すために、ユーラシアの伝統的な踊りと20世紀末に生まれたアメリカのヒップホップ系（ストリート系）の黒人の踊りの特徴を示し、よさこい系、YOSAKOIソーラン系の踊りの特徴と比較してみよう。

まず、ヨーロッパとアジアの「伝統的」な民族舞踊の特徴を、特に上半身の置き方、脚の動かし方や、腕の振り方の特徴を中心に分類してみる。

各国の「民族舞踊」は、異文化交流・移民・経済活動・政治変動により、その変容はますます激しくなっており、衣装や所作、音楽は、数十年前のものと比較するとその多くが明らかに変化している。

しかし、各民族・各国の庶民の踊りには、基本となる動きの型が存在し、それが各地域性を示している。国ごとの違いもあるが、国の中の地域の違いや、踊りが生まれた時代やジャンルによっても異なる。また、踊りの社会的文脈も異なる。

しかしここでは、踊りの社会的機能は無視して、踊りの型の特徴を大枠で捉えることを目的として、西洋の民族舞踊を単独ダンスとカップルダンス、そしてチェインダンスに分類し、さらに中近東から東アジアの地域の、踊り手どうしが集団で踊るときもお互いに手をつなぐことを全くしない非接触型集団ダンスと捉え、その上で日本のよさこい系ダンスの踊りを照らし合わせ、その特徴を浮き彫りにする。

まず、ヨーロッパの伝統的な庶民の踊りでは、どのような踊りでも、腕で抽象的あるいは具象的な描写表現はほとんどせず、どちらかというと、腕は体のバランスをとったり、接触型の踊りでは互いに支持したり、引いたり押したりしてパートナーや仲間を誘導し、コミュニケーションをとるために使われる。

ヨーロッパでは、ソロで踊られるスコットランドのハイランドダンスやアイルランドのステップダンスでは、腕の位置は固定され原則動かさない。ハイランドダンスでは「鹿の角」を表すポジションか、脇腹で固定、またステップダンスやスコットランドのカントリーダンスのソロで行うトラベリングステップ時では、両腕は、横に垂らすだけである。また、ヨーロッパの多くの牧童の踊りで、振り上げる脚の踵や膝を、手の平で打ちつけるレゲニッシュ系の踊りは、腕は手で打つための打楽器のバチとして使われている。表象のために使われるのではない。

フランスのカドリーユやスコットランドのカントリーダンスなどで男女がカップルで踊るときには、男性と女性が結んだ手は両人の中心に置かれ、回転の際には回転軸となり、互いを支え合い、あるいは、握り方や腕の微妙な動かし方により、パートナーを次の動作に誘導する。ハンガリーのチャルダッシュでは、横に半開きになって並んだカップルが互いに近い方の腕の手の平を、相手の背中や腕の一部に添え当て、わずかに押すことで、相手に回転の契機を与える。腕と手は、カップルダンスでは支持や誘導のために使われるのである。

地中海地域および旧オスマントルコの領域内に広く分布する、横一列になって腕や肩を組んだり、隣の人の帯やベルトをつかんで、同時に同じ動作で踊るチェインダンス（ラインダンス）系の踊りは、互いを拘束・支持しつつ、同時に同じ動作をして、その一体感を楽しむ。いずれも、腕で情感や具象的な事物を表現しようとするものではない。チェインダンスはヨーロッパでは、男女交互に並ぶこともあるが、イスラム世界では、男女は別の場所で、男どうし、女どうしでチェイン（ライン）を作って踊る。

ヨーロッパ世界では例外的に、東方から流れてきたロマ（ジプシー）は、スペインのフラメンコであろうと東欧のジプシーの踊りであろうと、腕で情動を激しく表現するが、この系統の踊りは、どちらかというアジアの諸民族の踊りと共通する。

ヨーロッパの民族舞踊では、自分の身体をパートナーや仲間に預けたりして、自分の身体のバランスを一時的に崩して踊ることは、一部例外的に存在するが、基本はダンサー自身の上半身（体幹）は、大きく揺らして踊ることはなく、腰の上をしっかり乗せて、頭も大きく振ることなく踊る。

アジアの各地域では、イスラム教・仏教・儒教の影響からか、男女が身体を接触して踊るという習慣がなかった。イスラム世界では、家族生活を除き、成人男女は別々に行動する。踊りも男女と一緒に踊るということは、社会通念上一般ではあり得ず、プロの女性ダンサーのみが、男性の前で踊る。また、ガフズイーなど、特殊な部族民の女性ダンサーのみが、祭りの会場で、群衆の前で踊りを披露する。

アジアも西から東に行くにつれ、踊りは、一人一人が他人と接触せずに個々に踊るものとなる。日本の伝統的な各種の踊りも当てはまる。アジアのうち、南方の稲作農耕民族は、腰布等の筒型の衣装を腰回りに付け、また、固い底を持つ靴を伝統的には履かず、裸足、またはサンダル生活をしてきたために、腰を折り、膝を曲げ、地面を強く蹴ることのない、すり足の踊りが発達している。

一方、北方の騎馬民族の流れを汲む踊りは、男女ともに衣装も巻き布ではなく、パンツ（ズボン）を履き、シャツやカフタン<sup>1</sup>等の身体に密着させた衣装を着て、脚を高く上げたり、ジャンプしたりする踊り、早足で歩く踊りを発達させた。しかし、ヨーロッパのような硬底の靴は余り発達しなかったせいか、大きく片脚または両足でジャンプするような踊りは20世紀になるまでほとんど発達しなかった。また、アジア北部でも、男女が手をつないで踊るという習慣は伝統的になかった。これらの伝統が変容したのは、西洋化・近代生活の洗礼を受け、ライフスタイルが大きく代わり、身体習慣も変わってからの時代である。

一般的にアジア各地の伝統的な踊りは、その表現の方法は様々だが、腕は何らかの表象を示す型を持って踊られた。腕は型を求められるので、型が意識され、踊る最中に腕に力が入り、意識が強く向いている。

一方、アフリカから渡ってきたアメリカ大陸の黒人の踊りの基本は、体幹のインターロック（波動連続的な動き）が基本であり、腕の動きは体幹の動きに連動・共動・反動して付いてくるものであり、腕で何かを表象・表現しようとするものではない。また、腕を積極的に振ることによって、首・胸・腹が逆の方向にビート感を持って動くが、腕を振ることが主な意図ではなく、意識は体幹を振ってビートを実感する方向に向いている。ユーラシアの伝統的な踊りは、体幹はできる限り直立に置かれ、体幹と脚の連携を保ち、腰の力を抜くこととはしない。一方、黒人の踊りは、ビートに合わせて体幹を振るが（とくに前後に振るが）、ビートの一瞬だけ力を入れて体幹を振り、その後の瞬間は体幹も含めて身体をリラックスさせる。腰は少し下げ気味であり、腕はぶらぶらさせている。しかし、音楽のリズムはしっかり体幹で受容され、身体全体を揺らせている<sup>2</sup>。一般にアフリカ系の黒人のダンスは、音楽のリズムやダンサーが自ら歌う、あるいはリズムを付けて言葉を発する行為と不可分であり、米国の黒人のヒップホップもその伝統を受け継いでいる。

ユーラシア（ヨーロッパとアジア）の伝統的な踊りは、一般にダウンビート（奇数拍）にアクセントがあり、一方、黒人のヒップホップ系の踊りはアップビート（偶数拍）にアクセントがある。日本人の若い世代は、新しいダンスを通して、今黒人のアップビートのリズムを学習中である。

## よさこい系踊りと祭りの発展略史

以下、高知市の高知よさこい情報交流館の展示資料を中心に、高知のよさこい祭りの歴史をまとめてみた<sup>3</sup>。

高知県高知市は、第二次世界大戦末期の昭和20年（1945年）に空襲に遭い、戦災によって市街地のほとんどが廃墟と化し、また翌昭和21年（1946年）には南海大地震があり、人々は物資不足にあえぎながら、奮闘して市民生活を取り戻していった。戦後5年経った昭和25年（1950年）には、高知市が主催した「南国高知産業大博覧会」のテーマ音楽を、古くから伝わる土佐の民謡の「よさこい節」に決定した。歌だけではなく踊りも街頭に出そうではないかということになり、元々お座敷舞であったものを「街頭用」に振り付けるように日本舞踊の五流派（花柳・若柳・藤間・板東・山村）の師匠たちに依頼して、「よさこい踊り」が街頭に出ることとなった。

博覧会では一定の成果を上げ、「よさこい踊り」も次第に市民一般に広がった。昭和28年（1953年）には、「よさこい踊り子隊」が徳島県の池田に招かれたが、徳島の阿波踊りの力強いリズムに圧倒され、「よさこい踊り」を新しい形にしたいという声上がり、高知商工会議所観光部会が新しいよさこい踊りによる「よさこい祭り」の構想を持つようになった。現在の「よさこい鳴子踊り」は、徳島の阿波踊りを参考に、阿波踊りに対抗できる、楽しく人気のあるものにしたいという願いから生まれた。そもそも鳴子は楽器ではないが、鳴子を持って踊ることで、ビート感が付く契機となった。

昭和29年（1954年）6月25日に高知県商工会議所観光部会の濱口八郎氏が、「市民の健康祈願祭に阿波踊りに対抗するような、踊りみたいなものをやりたいが、考えようせ。祭りは8月10日・11日に決まったから、今月中に頼む」と武政英策氏に依頼。武政英策氏は、NHK京都交響楽団の初代指揮者で、作曲家でもあったが、戦時中大阪の自宅が焼け、高知の南国市に疎開。以後、高知市に在住していた。武政氏は、5日間で民謡のよさこい節に「ヨッチャレ、ヨッチャレ、ヨッチャレよ」（土佐弁で、「寄ってくれ、寄ってくれ（横にどけ、横にどけ）」という意味）という軽快な前奏と、「高知の城下に来てみいや、じんばもばんばもみな踊る。鳴子両手によく踊る、よう踊る」という短いメロディをつけ、「よさこい鳴子踊り」として、完成させた。また、徳島の阿波踊りが手にプロップ（小物）または鳴り物を持たずに踊るのに対して、武政氏の提案で、高知ではカスタネットのような鳴子を持たせ、踊りを大きく見せるとともに、賑やかさを演出した。

鳴子は、元々田畑の鳥を追い払うために揺らして音を出す道具として使われた「すずめおどし」で、これを改良し、意気盛んな南国土佐のシンボルとして、よさこいに使おうと武政氏が発案した。

踊りの振りは、再度、日本舞踊の師匠たちに依頼した。こうしてできたのが、「正調 よさこい鳴子踊り」の唄と踊りである。当初の曲は、商工会議所が日本舞踊の師匠たちに曲の振りを依頼していたため、4ビートの曲のようだったが、武政氏は、これをよしとせず、昭和29年にヒットした映画「南国土佐を後にして」のバックダンスで8ビートの曲に変えており<sup>4</sup>、以後、時代とともに、踊り手が踊りやすいように、各踊りチームごとに踊りも曲も変えて良いとした。また、古いフィルムをよさこい交流資料館で拝見したが、実際には16ビートで伴奏された踊りもあった、

踊りは当初、「正調鳴子お踊り」の8ビートが主流で、男女ともに揃いの浴衣が主流のようだったが、男女ともに白い短パン（パッチ）に半被、豆絞りののはちまきもあり、あるいは女性が浴衣に半月折りの編み笠、または徳島の阿波踊りの衣装のようなものだった。

鳴子も腕を思いっきり伸ばして「カシャッ」と打つのではなく、少し腕を湾曲させて盆踊りのような腕の科しなで手を振り、鳴子を打っていた。踊り自体の経年変化が大きかったかどうかは、毎年の映像音響資料が手に入らないのでわからないが、毎年のように踊りの会場運営には工夫はあったよ

うだ。また、衣装の方は1960年代までは、浴衣とパッチが主流のように見受けられるが、1970年代には万博やフランス・ニースのフェスティバルに遠征する様になり、衣装も70年代からは色彩や絵柄に変化が現れ、さらに80年代には、踊りも衣装も多様になった。

昭和29年（1954年）の第1回目の祭りから、踊りの競演審査もあり、各踊りチームは、踊りの技を競った。第1回目は、高知公園追手門内の本部会場と、帯屋町2丁目、グリーンロード、はりまや橋、本丁筋3丁目、愛宕町、菜園場、梅の辻の市内7カ所で競演会場が設けられた。最初の踊り子の参加者数は21チーム、750人であった。

昭和31年（1956年）の第3回では、優秀団体に優勝旗を贈ることになり、総勢250名の下町商連のチームの存在感が刺激となり、各町内のチームが、大人数化することとなった。この年は、39チーム、1,700人で踊られている。

昭和32年（1957年）の第4回の祭りでは、地元商店街チームは減ったが、会社や官公庁の職場チームが増え、また、地方車が登場した。伴奏は、主としてそれまでレコードが中心であったが、特別編成のバンドが主流になった。

第6回目の昭和34年（1959年）には、ベギー葉山の歌う「南国土佐を後にして」が全国的にヒットし、土佐ブームがわき起こった。新作踊りが歓迎されたため、工夫を凝らした踊りが次々に生まれた。また、この年、県内唯一の民放テレビ「ラジオ高知テレビ（現・高知放送）」が実況中継を開始した。第6回は、参加チームは13と減少したが、踊り子数は、2,500人に増加した。踊りの多様化が始まった年だった。

「正調」に戻ろうとする動きもあったが、多様化の波は止められなかったようだ。武政氏は、「今日芸能は民衆の躍動。要は民衆の心の中に受け入れられるかどうか。よさこい鳴子踊りも時代と共に変わっていく。」という言葉を残し、多様化を歓迎した。

第7回（昭和35年、1960年）には、本部競演場を、高知市内で高知城に続く、より広い追手筋に移し、審査用の檣と見物用の栈敷を設置した。

第10回（昭和38年、1963年）には、43チーム、3,500人の踊り子が参加。

第11回（昭和39年、1964年）には、チームの顕彰とは別に、優れた踊り子には競演場で本人の首に直接メダルがかけられるようになった。この年は40チーム、3,500人の踊り子の参加であった。

第17回は大阪万博（昭和45年、1970年）の年に当たり、万博の「お祭り広場」でもよさこい踊りを披露。「日本の祭り10選」に選ばれた。この年の高知での参加チーム数は45、踊り子数は4,000人だった。

第19回（昭和47年、1972年）の年は、大阪万博の「日本の祭り」でよさこい鳴子踊りを見たフランス・ニース市のメデサン市長から招待を受けて、ニース・カーニバルへ参加した。フランス国旗をデザインしたトリコロール調の衣装にサンバのリズムを取り入れ、女性も短いパッチで素脚を見せて踊り、好評だった。このニース・カーニバルの成功を機に、踊りや衣装が更に派手になる。この年7月5日に土佐山田町繁藤で山崩れによる大災害が発生、祭りが8月29日からの3日間に延期された。参加団体は43、踊り子数は3,500人。

第20回（昭和48年、1973年）の年にもニース・カーニバルに出場。この年、高知市外から出場を希望するチームのために、鳴子踊りの巡回指導が始まった。この年の参加団体は63、踊り子数は5,500人。この頃のビデオで確認すると、女性が短いパッチをはくことも普通になったが、鳴子は、腕を思いっきり伸ばして打つというのではなく、相変わらず、少し腕を曲げた打ちやすい位置でならされていた。

第23回（昭和51年、1976年）、プラスバンドやエレキバンドの伴奏が増える。参加団体は47、踊

り子数は5,200人。

第27回(昭和55年、1980年)になると、衣装・メイク・踊りもそれまでの日本調から抜けたようなチームが出てくる。時間差で各列が所作・回転を行う等の演出も頻繁に現れるようになった。

第30回(昭和58年、1983年)、参加団体86、踊り子数が1万人を超える。大型トレーラーの地方車が注目の的となる。

第34回(昭和62年、1987年)から踊り子の後進は禁止され、チームの人数は最大150人に制限される。各団体を限られた放送時間で平等に紹介するという考えが働いたようだ。

第36回(平成元年、1989年)、高知市制施行100周年。追手門筋本部競演場に予約枠敷席を設ける。踊り子1万5,000人を超える。

第38回(平成3年、1991年)、8月9日に中央公園で、前年の優秀チームが演舞する「前夜祭」が開催されるようになった。参加団体数137、1万6,200人。

第39回(平成4年、1992年)、北海道札幌市でYOSAKOIソーラン祭りが開催され、よさこいが各地へ広がるきっかけとなる。参加団体数138、参加人数1万6,200人。

伊藤多喜雄<sup>5</sup>が、1993年、北海道稚内南中学校の郷土芸能部の「ソーラン節」を音楽プロデュースするが、第9回日本民謡民舞大賞(テレビ東京)で審査員奨励賞を受賞した。その後、北海道稚内南中学校の『南中ソーラン』は、全国の小学校・中学校の運動会等で踊られるようになる。1994年には、北海道稚内南中学校の郷土芸能部の「ソーラン節」は、第10回日本民謡民舞大賞(テレビ東京)を受賞する。

高知のよさこい祭りは、第42回(平成7年、1995年)、「受賞チーム」の踊りを見たいという要望に応え、初の「後夜祭」が開催される。参加団体数123、参加人数1万3,300人。

第43回(平成8年、1996年)、衣装の日本調への回帰が見られ、「新和調」が広がる。以後、様々な工夫を凝らした特殊な衣装も存在するが、一方で多くのチームで「新和調」が採用されるようになった。

第46回(平成11年、1999年)、よさこいが各地で踊られるようになり、交流と連帯を深めようと本場の高知で「よさこい全国大会」が開催される。よさこい祭りの生みの親である武政英策氏の歌碑が中央公園に設置される。参加団体数134、踊り子総数1万5,000人。

2001年には第1回原宿スーパーよさこいが開催。高知系のチームが毎年10チーム参加。原宿商店街主催。8月の最終土曜日と日曜日の2日間にわたり、東京都渋谷区の明治神宮、同原宿口、代々木公園、表参道などの会場で行われるようになった。

第50回(平成15年、2003年)、記念パレードが電車通りと帯屋町アーケードで行われる。高知公園追手門内に全国大会ステージとして46年ぶりに特設舞台が復活する。参加団体数187、踊り子総数2万人を突破。

第57回(平成22年、2010年)、高知のよさこいが舞台となった映画「君が踊る、夏」が公開。高知駅前演舞場が40年ぶりに復活。参加団体数188、踊り子総数1万8,000人。

6 第58回(平成23年、2011年)、東日本大震災の年。被災地の子供たちを招待する。参加団体189、踊り子総数1万8,000人。

第60回(平成25年、2013年)4月27日、高知よさこい情報交流館がオープン。祭りの参加団体214、全国大会のみの参加のチームを合わせると236、2万人以上の踊り子。期間中、四万十市では40度を超える暑さを記録。

第61回(平成26年、2014年)前夜祭が台風の接近で開催できなかったが、本祭と全国大会が開催される。

## よさこい系踊りの変化の時代

踊りの変化は、急にやってくるものではない。一部の団体がその時代の主流から外れた新奇の踊りを披露しても、それが、流行として多くの団体に採用されるわけではない。多くの団体が、ある種の時代の流行を取り入れるには、年月がかかるようである。さて、よさこい交流資料館にある、よさこい祭りの歴史のフィルムやポスターを何度も見ながら、当初からの踊りの変化を追うと、よさこいが大阪万博やフランス・ニース遠征をするようになる頃から、法被や浴衣の色使いや、サンバのリズムを取り入れるなど、大胆な変化が試みられるようになった。また70年代末から80年代を通して、世の中はディスコが流行り、ディスコで踊られるような強いリズムと腕や上半身を思い切り伸ばす踊りが現れ、よさこい踊りに上方へ向けての伸びが出てきた。よさこいの踊りの中にも様々な「実験」が繰り返られるようになった。メイクも派手なものに変わっていった。しかし、この時代の踊りは股を大きく開いて、上半身・腕を思いっきり伸ばして止めるという所作にはまだ行き着いていなかったように見受ける。足を大股に開き、あるいは片足を屈伸させて低い姿勢でポーズを取るという動きは、現れてもまだほんの一部であった。

1992年になると北海道でYOSAKOIソーラン祭りが、ソーラン節をベースにした踊りとして始まったが、よさこい節がお座敷唄・お座敷踊りから発達した女性の上品な踊りをベースにしているのとは対照的に、ソーラン節とその踊りは、漁師の唄と所作をベースにしている。YOSAKOIソーラン踊りの前身のソーラン節の振り付けは、足を大きく開き、ニシン漁師が舟を漕ぐために足場を確保し、櫓を漕ぐ仕草を表現したり、足を十分に開いて網綱を力いっぱい引くきわめて男性的な所作が入る。網綱を引く動作や捕れた魚を斜め後ろに放り投げる漁師の動作は、網走の「南中ソーラン」の踊りに受け継がれている。「南中ソーラン」では、足を開き、腰を落とした姿勢で、手をひらひら振り、波を描写する所作も入ってきている。これらの動きが、各地のよさこいソーランにコピーされて、基本は漁師の所作を活かしながら、自分たちの毎年のテーマに合わせた振り付けをするという方向性が出てきたように思われる。

また、衣装については、網元が着る、大漁旗のような派手なデザインの前半纏を羽織り、その内には、黒い腹掛け・股挽きを身につけるスタイルが典型となっている。前半纏は、踊りの途中で裏返して色目を変えるという演出が多い。また、目立つ帯を腹に巻き、手甲を付け、はちまきを巻き、地下足袋を履くという形がYOSAKOIソーランの典型的な衣装パターンだろうか。現在では男性も顔にメイクをして、異形性、非日常性を強調している。

一方、高知のよさこい踊りの方に目を戻すと、1990年代は日本回帰の時代であった。踊り・音楽・ファッションも多様性は続いたが、全体的な流れとしては、踊りのファッションが日本調のものに戻ってきた。しかし、それは白地の浴衣や白のパッチに青の祭り半纏ということではなく、新感覚を強く意識した鮮やかな創作和装である。こちらの方は、町衆の「雅」や「粋」が強く前面に現れている。商店街のチームや商店の多い町内会でチームを組み、白地に赤や黄色を強調したライン、また振り袖を利用して、衣装の色合いの美しさをよく見せようとするデザインが発達し、手を横に大きく開いて一瞬動作を止めて、振り袖衣装の色合いの美しさを見せる瞬間を、振り付けの中に意識的に組み入れた。高知のよさこい踊りは、道を前進して練り歩きながら踊るのが中心だが、踊りの進行中180度後ろを向くことがよくある。この時、両腕を大きく広げて、振り袖の反対側を観客に見せるのであるが、振り袖の表と裏の色合いや柄を変えることで、180度ターンするとチーム全体の衣装の色合いが一瞬のうちに変化し、その鮮やかな転換に観客は目を見張る。複雑なよさこいの衣装を各チームのロゴも含めて染め上げて、専門に製作する衣装制作会社が現れた。90年代には、綿素材の衣装から、ポリエステル、ナイロン等の化繊を使用した衣装が増えた。

さらに、色鮮やかな衣装を尚美しく見せるためには、動作を大きくしなくてはならない。鳴子を鳴らすときの振りも、腕をより大きく伸ばし、身体全体を衣装と共に大きく見せる振りが増えてきた。90年代から、腕をより大きく最大限まで上にあるいは横に伸ばし、鳴子を「パンッ」とならして、一瞬止める所作が増えた。

また、徳島の阿波踊りのような提灯を持って両手で振ったり、蛇の目傘を踊りの途中で開き回したり、踊り後方で旗を振るというのも、90年代から目立ってきた。本論文執筆時点ではよさこいにおける旗振りの起源は確認出来ないが、今では旗は綿製からナイロン製になり、竿も最近のものはカーボンファイバー製となり、よく撓るようになった。旗全体が軽量化され、各チームは、その分より大きな旗を競い合って作り、振るようになった。高知では英語の「フラッグ」がなまって「フラフ」とも呼ばれているが、元は「纏」と呼ばれていたようだ<sup>6</sup>。纏は、今では、踊りの最後尾に配置されることが多くなったが、元は最前列に置かれ、チーム名を染め上げた旗を振りながら、観衆の目を引き、これから旗にかざしたチームの踊りが練り歩くよと、チームの広報を兼ねていた。次第に、旗が大きくなり、チームの踊りの息の合った動きを観衆の視界から隠してしまう弊害も出てきたためか、最後列で振られるようになった。

### 高知系よさこい踊りとYOSAKOIソーラン系踊りの違い

高知系よさこい踊りとYOSAKOIソーラン系踊りの違いは、その使用される楽曲の違いや、座敷踊りと漁師踊りの起源の違いもあるが、踊りの場へのこだわり、地元コミュニティとの関わりとの違いからも、その特徴を記すことができる。

高知のよさこい祭りは、いわば高知市内の各コミュニティや職場から生まれたものであり、地元の踊り、地元の祭りという意識が強い。どのチームに入るかは、踊り子の自由意志に任されるが、それでも、よさこい祭り自体が高知市の地元の祭りであり、沿道で応援する人々も、その多くは高知市民である。踊りの場は、基本は「道」であり、沿道のお客さんにアピールすることになる。踊りは前進の踊りであるが、踊り子は時々90度向きを変えて、沿道のお客さんに笑顔と振りを見せる。お客さんの中には知人も多い。町内の人々も多い。各踊りの会場を運営するのも、地元の商店街と住民の人々である。そのような状況下で踊られる踊りである。そして、コミュニティの人々に自分たちの晴れの姿を見られながら、道を通り抜ける。踊り抜ける爽快感が踊り子たちにはある。「この会場を踊り抜けた、次はあの会場を踊り抜ける。」という、走り抜ける楽しさがある。観客の方も知人の踊り子に声を掛けたり、団扇をおおいで応援したりしている。そして、予定の全ての会場で踊り終わると、みんなで直会をするのである。いわゆる「打ち上げ」である。会場運営側のスタッフも含めて、町内会、商店街で打ち上げをすることもある。人々は、イベント後のこの瞬間も楽しみにしているのである。

高知のよさこい踊りには、ステージで踊る会場もある。しかし、ステージでは、観客との距離は遠くなり、走り抜ける(＝踊り抜ける)という達成感はない。

8 このような状況下で、高知よさこいの踊りは、基本の隊列が横4列で、後ろ方向に向かって先頭の4人に他の踊り子がきれいに列を合わせて、縦列する。そして、基本は、踊り子各人のポジションは、前後入れ替わらずに踊るのである。ポジションが入れ替わるとしたら、入れ替わりやすい隣の踊り子とのポジションチェンジである。しかし、全くポジションを変えずに4分30秒を踊るチームもある。したがって、全員が同じ所作を同時に行う、ユニゾンの踊りが多い。バリエーションがあるとしたら男踊りと女踊り(あるいは衣装の違う内側と外側の踊り)の違いである。つまり踊りのフォーメーションはごく単純だと言うことである。しかし、この単純な隊列の中に、踊りの「粋」や地域の「団結」、人々の「絆」が表現されているのである。



一方、YOSAKOIソーランの方は、北海道の札幌市の各会場で踊られるが、会場の環境を比較すると、高知とはかなり違うことに気がつく。高知は人口29万人の地方都市で、高知よさこい祭りの時期は、高知市全体が「よさこい」一色になるのに対して、190万都市の札幌市は、YOSAKOIソーラン祭りの期間でも、一般市民のほとんどは普通の生活をしている。都会のほんの一部の会場で祭りが挙行されているという感覚である。踊りの会場は、高知がおよそ16箇所であるのに対して、札幌市では例年20箇所以上あり、会場間の距離も小一時間かけて移動する場合もある。また、YOSAKOIソーラン祭りでもストリート踊りとステージ踊りの2種類の会場があるが、受賞を狙う各チームの主眼はステージ踊りである。特に大通公園の巨大なステージの演出を考えて、踊りが構成される。メインステージでは観客席とステージの距離はかなり離れており、勢い踊りの振りは大きくなり、演出は派手になる。

参加チームは、札幌市のチームも多いが、北海道各地、全国各地からの参加チームも多い。観客の多くは、一般のダンス鑑賞者ということになり、知人のパフォーマンスを応援するというよりは、ダンスコンテストの鑑賞者という趣である。沿道で踊り子たちを目近で見るのとは違い、遠く離れたステージを臨む場合、踊り子の細かな顔の表情まではよくわからず、踊りチームの全体のフォーメーションを見て楽しむという鑑賞スタイルになる。高知の場合は、チーム全体の踊りの出来不出来の評価もさることながら、自分の知人の踊りを見たいのである。したがって、現在のYOSAKOIソーランはどちらかというと、ダンス愛好者による賞を狙った踊りコンテストの意味合いが強いイベントになっている。賞を狙うチームの踊りは、チームが複雑にいくつものパートに別れ、前後左右のポジションを変えつつ、踊りも緩急を織り交ぜて踊られ、衣装の早変わりもあり、フラッグワークも音楽に合わせて劇的である。観客にとっては、ダンスの域を超えた一種のマスゲームを見ているようである。

### 重心が低い、横振りの踊りへ

高知のよさこい踊りが、様々な流行の踊りを実験的に取り入れ、衣装やメイク、音楽が劇的に変わりだしたのが1980年代とすると、90年代は、新しい流行りの音楽テクノロジーを消化しつつ、多くの流行りの若者の踊るダンスの要素を取り入れつつも、全体のイメージとして、もう一度高知らしい和風テイストを多くのチームは模索していた。一方、90年代には、YOSAKOIソーランが北海道で生まれ、ソーラン節系の踊りやテイストが高知のよさこい系の踊りにも入り込んできた。YOSAKOIソーラン系の踊りの多くは、脚を横に開き、体幹をしっかり支えつつ、思い切り身体を真上または斜め真上に伸ばし鳴子を打ったり、蹲踞の形でポーズを決めたり、片脚を横に伸ばす屈伸でポーズを決めたり、脚を若干開いたままジャンプして、180度あるいは360度あるいは90度身体の向きを変える動作をよく目にする。YOSAKOIソーランが生まれる前、高知でも重心を低くして激しく踊るチームは、第1回YOSAKOIソーラン祭りに高知から招聘された「セントラルグループ」等のチームにも見られたが、より腰を入れて踊る型が定着したのは、やはりYOSAKOIソーランになってから北海道の各チームがソーラン節にふさわしい踊りを模索していたからではないかと思われる。その中で特に「南中ソーラン」の影響は大きかったのではないだろうか。南中ソーランは、その後、学校教育の場でも採用され、多くの日本の子どもが習った踊りである。この踊りの体験をベースに、腰の位置が低く、腰を入れた様々な踊りが各チームで考案されたと考えられる。

高知のよさこい系の踊りは、現在でも草履を履いて踊るチームがかなり見受けられる。その場合、脚を横に思いっきり開く動作には無理がある。腕の振りはどちらかというと上方、肩から上の「所作」が中心となり、体幹を思いっきり揺らすという動きは難しい。これが、高知の雅で粋な衣装とともに、高知よさこいの踊りの特徴の1つになっている面がある。しかし、現在の躍り用の草履は、底

に滑り止めがつき、また踊り子の衣装の多くは、現在では浴衣の様な筒型衣装ではなく、男女ともに、パンツ（ズボン）を履く。上衣の着物にも左右の裾にスリットを入れる。高知でも、スニーカーや地下足袋を履き、脚を大きく開く動作は年々増えてきている様に思われる。

YOSAKOIソーランの脚を大きく開き、重心をかなり低くしながら、体幹をスイングさせる動作は、伝統的に日本民族が経験してきた動作であり、この動きには、日本人としてはどこか懐かしい身体感覚を感じる。肉体労働が中心だった時代、日本人は「腰を入れて」労働をしてきた。農作業で鋤を振るとき、大八車を引くとき、船の櫓をこぐとき、綱綱を引くとき、柔道で相手を投げるとき、日常生活でも、武道でも「腰を入れる」ことは、基本であった。この動作が、YOSAKOIソーランの踊りを通して、多くの日本人が再体験している。さらに、この動きに加わったのが、体幹の横のスイングや腰を中心とした回転運動である。

日本人は、上半身をお辞儀する様に軽く前後に振って、リズムを取ったり、上にびよんびよん跳ねる縦ノリの動作は、伝統的な身体動作として身につけていた。一方、胸を前後に振ったり、首を前後に振ったり、腰を前後に振る動作は生活習慣や伝統的な踊りの動作にはなかった。これらはヨーロッパの文化にも一般的に存在せず、どちらかというアフリカの黒人系の民族の身体動作習慣だった。これらの動きは、現在、ヒップホップダンスで日本人も体験することができる様になった<sup>7</sup>。また、ポリネシアンダンスやベリーダンスを通して、胸・肩・腰でビート（拍）を取る身体動作技法を日本人は今新たに学んでいる<sup>8</sup>。

一方、脚を大きく開き、横に体幹をスイングさせたり、回転させる動きから感じられるノリは、とくにYOSAKOIソーラン系の踊りが開発した新しい日本人のノリ感覚でないかと思われる。腰を入れる動作は日本の伝統芸能にも伝統武道にもあったが、体幹を横に大きく（重く）スイングさせたり、回転させる動きは、ソーラン節の踊りの体験をベースに、四方から観客に囲まれ、オープンエアの広い空間で大きく身体動作を見せなくてはいけないという状況、常に立ち位置を変え、移動しつつ躍る激しい躍り、地下足袋というフットギアが存在等が合わさって、世界に今までになかった新しい踊りの身体感覚＝ノリを提案しているように思われる。

- 
- 1 カフタンとは着物の衿のよな前を重ねて着たり、フックなどで衣服の前部を留めて着る上着、またはコート。
  - 2 七類誠一郎『黒人リズム感の秘密 改訂版』 郁朋社 2010 p.88、p.91、p.99
  - 3 高知市のよさこい交流情報館は、2013年にオープンした施設であるが、よさこい踊りとよさこい祭りの様々な歴史的展示がある。一部古いフィルムも常時上映している。
  - 4 武政英策氏は映画に合わせて〈南国土佐を後にして〉を作曲、ペギー葉山が唄って、彼女の代表的なヒット曲の一つとなった。また、この曲は、土佐高知の名を全国に広めた歌謡曲でもあった。1959年の古いフィルムの音源を確認すると、一部16ビートの伴奏もある。
  - 5 伊藤多喜雄（1950～）は、1988年『TAKIO ソーラン節』をCBSソニーからリリース。和楽器を取り入れたロック調の民謡を歌う。翌1989年、〈ソーラン節〉でNHK紅白歌合戦初出場。
  - 6 「ほにや」のwebページ参照。<http://www.honiya.com/kiminatsu/> 纏は、元は戦国時代、戦場で武将が所在を示すために立てた馬印。竿の頭に作り物をつけ、その下に馬簾を垂らしたもの。また、江戸時代の火消し組が戦国時代の纏を模して、各組の目印にしたもの。高知では、纏を旗振りの意味で使っている。
  - 7 七類誠一郎 前掲書 p.88
  - 8 Wendy Bounaventura : *The Serpent of the Nile Women and Dance in the Arab World* (Massachusetts : Interlink Books 2010) 『ベリーダンス用語集』イカロス出版 2013年 他参照

(受理 平成26年11月29日)